

山本眞一教授の退職を祝して

くらしき作陽大学学長／広島大学名誉教授

有本 章

山本教授の定年退職に際して、お祝辞を述べさせていただくことになりましたので、先生とのえにしの糸を手繰りながら、思い出を述べさせていただきたいと存じます。

第1に、山本教授の履歴を紐解きますと、他の高等教育研究者とは一味異なる点が目を引くにちがひありません。何よりも東大法学部を卒業された履歴に注目せざるを得ません。と言いますのは、東大法学部は日本のエリート輩出の拠点でありますし、実際、明治以来日本の各界エリート層の供給源を形成してきた事実を否定できませんし、その意味で同氏自身はその光栄を背負う人材であることに間違いのないと言って過言ではないからです。当然、ノーブレスオブリージュの責任は全身に刻印されているに違いないと想像しても不思議はないでしょう。そのような眼鏡をかけてキャリアを追跡すると学卒後、文部省に入省し活躍されたことが判明します。その後、埼玉大学大学院政策科学研究科を経て、どういうわけか筑波大学に転身して高等教育を専攻し、やがて筑波大学大学研究センター教授やセンター長を歴任されました。その間、文部省とは入省時の人脈を基軸に太いパイプを持ち、活躍されていると観測した次第ですが、どちらかと言えば文部省路線の高等教育政策を展開されてきたことは自他ともに認めるところだろうと拝察しております。

第2に私自身にとってはスカウトのことが想起されます。両者の接点は、それほど古くはないのですが、さりとて新しいというほど新しくもありません。最初は、1991年に千田町のセンターでお目にかかったようではありますが、その記憶はあまり定かではない。その後、1996年に大学教育研究センター等協議会を創設したときは、筑波大学大学研究センター長は原康夫教授であり、ご協力を得て創設に漕ぎ着けた記憶があります。その頃には何かと接触がありました。そののちに山本教授とは本格的な接触の機会が訪れ、彼がセンター長の時に外部評価委員会の委員長として招かれセンターを他者評価し、そのセンターが筑波の地に移動するのではなく、現在の地に残り文部省のお膝元で高等教育政策を展開するのが最適であると提言し、山本教授から評価いただきました。その頃から今日までは相互交流が持続してきました。

私の定年を間近にした時期に、センター長の後任を擁立することが課題となって、当時の学長の希望もあり、学外からの人材を招聘する方向を選択し、山本教授に白羽の矢を立てました。事前に内々の承諾を得て、筑波大学にお願いに行ったとき、正式には山本教授が所属するビジネス科学研究科の許可を得る必要があったのですが、たまたま同席された教育学系の山内先生は開口一番「人さらいが来た」と一撃され、いささか面食らいました。筑波大学にとって惜しい人材である以上、その程度の罵倒はあつてしかるべきだと思った次第ですが、それで怯む訳に行かないと奮起し、「オールジャパンのチームを作るためにぜひ移籍をお願いします」と粘って、スカウトは実現しました。

第3に遭難のことがあります。山本教授とのご縁を回顧すると、何かと思い出されることは少なくないわけですが、この事実は披歴しておきましょう。米国のハワイ大学など一緒に経験がある中で、数年前にデューク大学などを訪問した帰途に、ノースカロライナから早朝飛行機に乗ってニューヨークへ飛ぶ途中、エンジンヒートによってリッチモンドに不時着陸しました。このときは、遭難しても不思議ではなかったにもかかわらず、何とか奇跡的に飛行場に着陸できたのは不幸中の幸いでありました。一日当地に滞在して、次の朝、再度ニューヨークへ飛びました。もし二人が昇天していたら、センターは1人のセンター長と未来のセンター長の2人を喪失したのであり、その後のセンターの歴史は一変していたかもしれません。二人が乗り合わせたせいで事故が起こったのか、二人が乗り合わせたおかげでその程度で済んだのか、理由は分かりません。これまで飛行機に乗る機会は多くあったものの、後にも先にもその時だけそのような事故があったのであります。今にして思うと幸運であったというほかない出来事でした。

第4に大学教員の条件について考えてみますと、優れた大学教員の条件は、研究、教育、サービス、管理運営、学会活動、後継者養成などに水準を究めることでしょう。これらのすべての条件を満たす学者は決して多くはあるまいと思われませんが、山本教授は、これら各条件の水準を万遍なくクリアしておられるのではないのでしょうか。研究では、科学技術政策の専門家として、センターに来てもらいました。管見では昔ほどその業績は輩出されなかったようであるとしても、SDの研究などで活発な活動を展開されました。教育は、主として大学院の授業で院生を指導することであり、それを通して後継者を養成することです。文部省や審議会などのサービス活動を中心に東京や外国出張が多い中で、かなり困難があったと想像せざるを得ません。それでもよく任務を果たされていたのではないのでしょうか。管理運営は、センター長を3期5年間勤められたのでありますから、よく頑張っていたと御礼を言わなければならないでしょう。学会活動では、日本高等教育学会の事務局長や会長を務めていただき、斯界の発展に貢献されました。このように、優れた大学教員の条件を果たされて定年を迎えられた訳であります。

第5にセンターにとっての評価はどうでしょうか。上記のようにスカウトをして、センターに来ていただいた以上、センター長として、その発展にいかなる功績をあげられたかを評価しなければなりませんし、その際、高い評価が得られればスカウトの面目が保たれるし、そうでなければ面目ないことになると言わざるを得ません。私自身は、むろん前者であると確信しているところですが、このことは、時間の経過とともに後世の人々によって客観的になされると思います。

山本教授が今年度を以て退職されることは、定年規定があるとはいえ、寂しい限りであります。広島に来ていただき、本務を全うされましたことに対して深甚なる感謝の意を表し御礼を申し上げますとともに、目出たく退職に辿り着かれたことに対して改めて衷心より祝意を表したいと存じます。今後のご多幸を祈念しております。